

岩 波
国 語 辞 典
第 二 版

西 郷 実
岩 瀬 悦 太 郎 編
水 谷 節 夫

岩 波
国語辞典
第二版

西 尾 実
岩淵悦太郎編
水 谷 静 夫

岩 波 書 店

岩波国語辞典 第2版

1963年4月10日 第1版第1刷発行 ©

1971年2月5日 第2版第1刷発行 ©

1973年12月5日 第2版第4刷発行

¥ 750

編 者

にし
西
い
岩
み
ず
水

お
尾
え
淵
た
に
谷

お
悦
え
つ
た
し
ず
静

た
太
し
ず
静

みのる
実
ろう
郎
お
夫

発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします 凸版印刷・宮内製本

第二版に際して

第一版を刊行してからすでに八年になろうとしている。この間、日本語の変動は、決して少ないとは言えないようだ。社会の激動期であるからであらう。

語の意味用法に変化の起こったものがある。本来ある専門分野でだけ用いられていた語が、社会の変動に伴って他の場面にも使われるようになり、そのために意味が広がり、用法にすれの生じたものがある。また一方、新しい語が次から次へと生まれ、その中には辞書に採録すべきものも少なくない。いたずらに新語を拾ったり、新奇な意味用法を追いかけたりせず、社会的に十分に安定したと思われるものに限って採録するという、編集の基本的な考え方は、今回も第一版と変りはない。それでも、このたびの改訂に当たっては、相当に広い範囲にわたって筆を加え、また、新たに約六百語を補った。

漢字母は、語を構成する成分として取り上げたのであるが、これらの項目を一層利用しやすくするため、付録として索引をつけた。あわせて、そのほかの使用度の高い漢字も掲げ、一字一字の音訓を示すとともに、いわゆる難音訓に属する熟字の熟語の読み方をもしるした。

一体に、言語は、語と語とが結びついて新しい語を作るという性質をもっている。これら複合した形の語を数えれば、おびただしい数に上るであらう。小辞典にその全部を収容し切れるものではない。そこで、語が複合してゆく形態を明らかにするために、語の構成に関する概説を巻末に加えた。

なお、第二版から、編者として水谷静夫が加わることになった。

はじめに

しばしば、日本語のあいまいさということが指摘されるが、これは日本語自身の責任というよりも、日本語を使う人の側に責任がありそうである。各人が、一語一語の基本的意味を明確にはとらえていないで、その場その場でかなり勝手気ままな使い方をするために、社会全体から見ると、結局、その語の意味がきわめてあいまいだということになるのではなからうか。そして、語の基本的意味を明確に記述しておくのは辞書の役目のはずである。

この辞書は、現代の、話し、聞き、読み、書く上で必要な語を収め、それらの意味・用法を明らかにしようとした。携帯用であるため、採録の総語数は五万七千余に過ぎないが、どういう語を採録するかについては、厳密な検討を加えたので、現代人の生活に必要なものはほとんど収めてあるはずである。ただし、固有名詞は除いた。また、現代語の中でも、特に専門家や特殊な人々の間でしか使われないようなものは除いた。また、十分安定したとはいえない新語（外来語を含めて）は採録しなかった。採録語を、どこまでも、現代生活に必要なものという観点から厳選したところに、本書の第一の特色があるだろう。

漢字母を、その字音に基づいて、本文中に排列した。これは、単に漢字典典を国語辞典の中にまぜようとしたものではない。元来、日本語の中には多数の漢語が含まれている。その漢語を構成する単位としての漢字の働きを明確にする必要があると考えたからである。それは、一般に、接頭語や接尾語の説明が、辞書にとって欠くことの出来ないものであるのと同じことと言える。ただし、漢字母の場合は、一般の語と違って、字形や字画をはっきりさせる必要があるので、特に大きな活字を用いた。なお、漢字母としてあげたのは二千三百余字である。漢字母を造語成分の一つとして本文中に加えたのは、本

書の第二の特色である。

語の意味は必ずしも一つとは限らない。しかし、これまでの多くの辞書は、一語の意味を、あまりにも細かく、しかも並列的に記述して来たきらいがある。そして、どちらかというところ、その語の基本的意味がなおざりにされていたようである。この辞書では、このことを反省して、出来るだけ、一語一語の基本的な意味を説明しようとした。現象的なものよりも、その根底にひそむ根本的な意味を明らかにしようとしたのである。慣用語やことわざを、別の場所に取り出して説明することなく、そのもとになる語の意味の説明と密着させて説明したのも、またこの考え方に基づくものである。この点に、この辞書の第三の特色がある。

なお、日本語の中で最も基礎的な語と思われるものについては、出来るだけ多くの分量をさいて、くわしく意味・用法を記述した。また、意味の説明を記述するに際しては、まず初めに、現在普通行なわれている意味・用法を解説した上で、以前行なわれた用法にも触れるようにした。さらに、これまでの辞書では、一一の語に必ず漢字による表記が当ててあった。それらの中には、実際にはほとんど行なわれることのなかったものもある。そこで、この辞書では、漢字による表記は、実際の文章においてそのように書く習慣のあったものに限った。また、当用漢字表等の出現に伴って表記形の変ったものは、これをも示した。従って、この辞書は、読むためにも、書くためにも、参考になると思われる。これを本書の第四の特色とした。

辞書は、全く知らない語を知るためのものでもあるが、また、自分が知っていると思う語でも、その意味や用法を確かめるために引いてみる必要のあるものである。この辞書が多くの人々のために役立ちうるならば、これに越した喜びはない。

凡 例

収録した語

- 1 現代語を中心としたが、現代の生活の上で必要と思われるものは古語をも加えた。
- 2 動詞の連用形から派生した名詞は、場合によって省いたことがある。また、形容詞語幹に「み」「さ」が付いて名詞となったものも、特別のもののはかは省いた。
- 3 単語を構成する単位としての、接頭語・接尾語などの造語成分も、出来るだけ取り上げた。漢字母を入れたのも、一つ一つの漢字を造語成分と見たからである。
- 4 単語と単語と結合して出来た複合語のほかに、単語と単語とが慣用的に結びついているものも「連語」と呼んで取り上げた。

見 出し

- 1 見出し
- イ 見出しには原則として平かなを用い、現代かなづかいで示した。

□ 古語には「印」を付け、見出しを歴史的かなづかいで示した。

「さかふ」【逆ふ】

「あをひとぐさ」【青人草】

ハ 外来語は片かなで示し、長音には「ー」を用いた。

アーチ

なお、一語一語の表記は、国語審議会報告「外来語の表記」を参考にした。

バイオリン サンドイッチ

ニ 活用語は原則として終止形で掲げた。語幹と語尾との区別が立つものは、その間に「ー」を入れて仕切った。

きる【切る】【四他】

きる【切る】【下一自】

ホ 接頭語・接尾語を一つの独立項目として立てた場合には、次のように示した。

こ 接頭語

き 接尾語

2 歴史的かなづかい

イ 和語においては、見出しの次に歴史的かなづかいを示した。ただし、複合語で一部分がかなづかいの上で問題がないか、または見出しの現代かなづかいと同じである場合は、その部分を「ー」で示した。

あいだ【間】

あいて【間】

あおがえる【青蛙】

□ 漢語においては、原則として字音かなづかいを示さなかった。ただし、「様」「相」のように、古くからかな書きにすることの多かったものは、特に「やう」「きう」とその字音かなづかいを示した。

3 表記形

イ 【】の中に、その語の、書き表わし方を示した。ただし、見出しのかなと全く同じ場合は省略した。なお、表記形がいくつある場合は並べてあげた。特に、当用漢字表の実施に伴って、新しく国語審議会が認めた表記形をもあげた。

□ 漢字で書く語については、当用漢字表や当用漢字改定音訓表に取り上げられているものと、それ以外のものとを、次の記号を用いて示した。

印なし 当用漢字表にある字

△ あいどく【愛読】

△ 当用漢字表にある字であるが、改定音訓表にその音訓が取り上げられていない場合

くちもと【口許】

× 当用漢字表外の字。ただし、人名用漢字を含む。

いしがき【石垣】

△ 改定音訓表付表にある、一続きの漢字で特定の読みを表わす、いわゆる熟字訓を示す場合

いなかな【田舎】

△ 前項以外の熟字訓を示す場合

のり【海苔】

ハ 送り仮名は「改定送り仮名の付け方」を参考としたが、送り仮名法は時代によっても異なるので、送らないことが古い習慣である場合、または送っても送らなくともよい場合には、その部分を（ ）でくくった。

あみもの【編み物】

うまかわる【生まれ変わる】

ニ 西洋系の外来語で、ローマ字で書く形が普通である場合には、この欄にその形を示した。

ピーティーエー【PTA】

4 品詞など

イ 『 』の中にその語の品詞その他の文法上の性質を示した。次の場合には、その注記を省略した。

a 名詞。ただし、特に必要がある時は明記した。

b 単独項目として出した接頭語・接尾語

c 漢字母

ハ 動詞は一一動詞であることを断わってないが、活用の種類

と自動詞・他動詞の区別とを示した。

ゆく【行く】【四自】

よむ【読む】【四他】

いきる【生きる】【上一自】

かかげる【掲げる】【下一他】

ニ 形容動詞的に用いられるものは、次のようにして示した。

しずか【静か】【ダナ】

せいしん【清新・生新】【タケ】

ようよう【洋洋】【トタル】

ホ 漢語名詞で、「する」を付けて動詞としても用いるもの、あるいは、形容動詞的にも用いるものは、次のような形で、その事を明らかにした。

うんどう【運動】【名・ス自】

けんこう【健康】【名・ダナ】

いんせい【陰性】【名・カ】

△ 「と」を伴って副詞として用い、また動詞としても用いるものは、次のようにして示した。

いきいき【生き生き】【トス自】

ト 文語の形容詞は、ク活用かシク活用かを区別して示した。

のどけし【長閑けし】【ク】

うつくし【美し】【シク】

チ 単語と単語とが結びついた形が慣用的に用いられるものは、この欄に「連語」と記した。

えたりかしこし【得たり賢し】【連語】

うかぬかお【浮かぬ顔】【連語】

見出しの並べ方

1 見出しの排列は五十音順に従った。

2

五十音順で順序のきまらないものは、次のように定めた。

イ 「ん」は「を」のあとに置く。

ロ 清音・濁音・半濁音の順にする。

「こうとう」【荒唐】 ほんぶ【本部】

「こうとう」【行動】 ほんぶ【本譜】

「こうとう」【強盗】 ほんぶ【凡夫】

「こうどう」【合同】 ボンブ

ハ 促音の「っ」、拗音(゛)の「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ、「つ」「や」「ゆ」「よ」のあとに置く。

「ねつき」【寝付き】 しょう【私用】

「ねつき」【熱気】 しょう【省】

ニ 外来語を表わす時の小字の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」は、普通

のかなのあとに置く。

ふあん【不安】

フアン

ホ 長音符号ーは、その場合の発音が、ア・イ・ウ・エ・オのいずれかであることによって、それぞれの音を表わすかと同じ

ものと認める。

ガーター は ガアター の位置に置く

コーヒー は コオヒー の位置に置く

そして、普通のかなのあとに置く。

きい【奇異】

キー

3 見出しの、かなで書いた形が全く同じである場合には、次のように排列した。

イ 文法的性質の上から次のような順序。

活用語 動詞(四段・上一・上二・下二・変格の順)

動詞型接尾語

形容詞 形容詞型接尾語

助動詞

無活用語 名詞 代名詞 形容動詞語幹 副詞

接頭語 無活用接尾語

連体詞 接統詞 感動詞

助詞

ロ 和語 古語 漢語 外来語 漢字母 の順序。

ハ 漢字母の間では、「康熙字典」の排列の順序。

4 同音語で意味の似たものは、場合によって同一見出しのもとに収めた。

かしよう①【過小】……………②【過少】……………

5 外来語の場合は、別語であっても、かなで書いた形が同一である場合は、一つの見出しのもとに収めた。

ライト①光。光線……………④……………▽①)④は

light⑤右。⑥……………▽⑤⑥はright

6 次のような場合には、見出しの語を説明した次に、その語を含む複合語を、合わせ掲げて説明した。

イ 和語では、二つ以上の単語で出来ている複合語が、さらに他の語と合して複合語を作った場合。

「ちどり(千鳥)」に対して「ちどりあし(千鳥足)」「ちどりがけ(千鳥掛)」

ロ 漢語では、漢字二字以上で出来ている熟語が、さらに他の語と合して複合語を作った場合。

「安全」に対して「安全剃刀」「安全器」「安全装置」「安全地帯」

ハ 外来語では、その語と他の語と合して複合語を作った場合。

「ゴム」に対して「ゴム消し」「ゴム長」「ゴムの木」

説 明

1 基礎的な語と考えられるものには、特にくわしい説明を加えた。

2 意味の説明に当たっては、その語の現象的な意味を一一細かく分けて説明するよりも、出来るだけ基本的な意味を明らかにするようにした。

3 一語にいくつかの意味を立てた場合には、時代的に古い意味から始めることなく、出来るだけ現代語として最も普通に行なわれている意味から始める方針をとった。

4 いくつかの意味のうち、古語として特有の意味をもつものがあれば、その区分記号の上に→を付けて区別した。

しな【品】①何かの用途にあてて、形がある物。②ものの等級。③……④……⑤……⑥……⑦……⑧……⑨……⑩……⑪……⑫……⑬……⑭……⑮……⑯……⑰……⑱……⑲……⑳……㉑……㉒……㉓……㉔……㉕……㉖……㉗……㉘……㉙……㉚……㉛……㉜……㉝……㉞……㉟……㊱……㊲……㊳……㊴……㊵……㊶……㊷……㊸……㊹……㊺……㊻……㊼……㊽……㊾……㊿……

5 その見出しの語が、常に一定の成句の中に現われるようなものは、その成句の形を、説明の初めに『』で包んで掲げ、その成句全体についての意味を説明した。

あげあし【揚げ足】『』を取る『』人の言葉じりや言い誤りをとらえて、なじったり皮肉を言ったりする。

6 語の接続の仕方などの文法的な説明は、△△に包んで、その項の説明の最初に置いた。

→①△名詞・動詞・形容詞にかふせて▽語調を整えるのに使う。

7 その意味が特殊の範囲で使われるものであって、理解のために必要と認められるものは、『』に包んで、その語の分類を示した。たとえば、

〔仏〕〔仏教語〕〔俗〕〔俗語〕
〔宗教〕〔哲学〕〔法律〕〔経済〕〔取引〕
〔数学〕〔物理〕〔化学〕〔天文〕〔音楽〕

8 意味の理解を助けるため必要な場合、↑を付けて対義語を示した。

げんいん【原因】〔名・ス自〕……………↓結果

9 他の項目を参照すべきものは、↓を付けて、その項目を示した。

10 意味の理解を助けるために、つとめて用例を「」に包んで掲げた。また、用例のうち、意味のわかりにくいものや、ことわざ・成句などについては、その解釈を（）で包んで掲げた。

きよくじつ【×旭日】朝日。「昇天の勢い」
あら【新】……………「年寄りに―湯（＝まだだれもはいていない湯）は毒」

あく【灰汁】①……………②……………③……………「」の抜けた人（俗気がない、または粹い人）

11 古典から用例を引いた場合は、原則としてその書名（略称）を用例のあとに（）に包んで示す。たとえば、

〔記〕古事記（書紀）日本書紀（万）万葉集
〔古今〕古今和歌集（伊勢）伊勢物語（枕）枕草子
〔更級〕更級〔日〕日記
ただし、作品名を掲げず、作者名によったものもある。

〔近松〕近松門左衛門の作品
〔芭蕉〕松尾芭蕉の句

〔子規〕正岡子規の俳句または短歌
〔一葉〕樋口一葉の作品

12 用例中の、見出し語に当たる部分は―で略す。ただし、活用語で見出しの形とちがう活用形が使われている場合は、語幹を―で表わし、・を付けて語尾を添える。また、語形全体がちがう形の場合は、略さないでこれを太字で示す。

そうけん【送検】〔名・ス他〕……………「書類―」

人名用漢字別表にある字

か【^{*}歌】
うたうた
うたう
①……………②……………
字、「哥」は同字
▽「哥」は古

あ

【あ】「我・吾」代 わたし。われ。「一」を忘らすな(万)

【あ】「ア」 ①次く。第二段。二のつぎ。「亜」

学で、無機酸の酸素原子が比較的少ないものに冠する。亜硫酸・亜硫酸塩。③外国語の音訳に使う。

「亜利加」④「亜利比亜」⑤「亜細亜」の略。

「亜政・東亜」⑥「亜爾然」の略。

【あ】「ア」 ①言語の発音ができない。また、音の

然・啞音・啞鈴

【あ】「ア」 ①高い丘。②岸。まがりかど。く

る。「阿世・阿附・阿親」④人を親しんで呼ぶ時に冠

する。「阿兄・阿母・阿父」マ国語で、女の名に冠して

愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」阿千

の音訳にも使う。「阿子・阿母・阿父」阿彌陀(な)、阿修羅

【あ】「阿片」⑥「阿波」の略。「阿州」⑦「阿弗利

加」の略。「南阿連邦」

【あ】「ア」あのように。「一」なつてはだめだ。「一」言えは

ば「ア」①「ア」あのような「ア」①「ア」まで「ア」あれ

【アーク】「アーク」放電を利用した電燈。向き合っ

た二本の炭素棒に電流を通すと、その間に白熱光を

出す。弧光燈。マ炎の部分が弓なり(ア)なのでこの

名がある。

【アーク】「ア」洋式の大きな建物をつらぬく、かまぼ

形の天井をもつ通路。②道の上に屋根をおいてかま

せた商店街。Arcade

【アース】「アース」大地を電路の一部として利用するた

めに、電路を地面につなぐこと。電気器械と地面との

間に電路を作つて、電気を大地に逃がす装置。接地。

△earth(＝地球。大地)

【ア】①上方が半円形をなす構造物(家の入口、橋、

トンネルなど)。せりもち。②竹や木の骨組みをスキ・ヒ

キなどの青葉で包んだ門。縁門。Arch

【アート】「アート」紙面に植物質の塗料を塗り、なめらか

にした洋紙。写真版の印刷に多く用いる。アート紙。

Art paper

【アベント】一定の題目で夕方から開かれる催し(演奏

会・講演会など)。「グーテ」(A. Abend)「タ

アメン」(感・名)キリスト教で、いのりの後にとなえる

語。Amen(＝まこと)。確かに

【アモンド】「アモンド」①中央アジア原産。葉・

果実は桃に似る。種子は洋菓子に使われ、また、けいれ

んせき等をしめる薬名。アモンド。Almond

【アル】面積の単位。記号 a。一アルは一〇〇平方メ

ートル。二〇坪強。Arecare

【あい】「相」①動詞にかかふて、組になり、または一

方が他方に対して向かう関係にある意を表する。いっし

よに。互いに。「一」携えて。「一」対する。②動詞にか

かふて、語調を重しにするのに使つて、いかが一成りま

しょうか。③変わらす。△あつの連用形から。

【あい】「藍」①たで科の一年生植物。秋、穗状の赤い

小花をつける。葉・茎から染料を取る。②藍山から取

つた染料。今は化学的に合成する。また、それで染め

た色。濃い青色。インジゴ

【あい】「間」①あいだ。すきま。②あいさようけん

【あい】「愛」そのものの価値を認め、強く引きつけられる気

持。①かわいがり、いっしょに心。子にそそぐ。い

つくし恵むこと。神の「一」いたわりの心。人類

②大事なものとして慕ふ心。母への「一」。特に、

男女間の慕ひ寄る心。恋。③その価値を認め、大事に

思ふ心。「真理への」

【あい】「愛」アイ・いとしむ。①かわいがり。いと

【愛憎】「愛憎」愛憎・愛憎・愛情・思愛・偏愛・博

愛・寵愛・親愛・母性愛。②男女が思ひあふ。親

好感をもつ。面白と思ふ。「愛好・愛玩・愛読」

③好感をもつ。面白と思ふ。「愛好・愛玩・愛読」

④大切にものす。「愛護・愛護・自愛・友愛・祖国愛」

【あい】「哀」アイ・あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

【哀】「哀」あわれ。あわれむ。①悲しむ。悲しい。

あいかき【合×鍵】一つのかぎのほかに、その錠に合う他のかぎ。また、その錠に合わせて作ったかぎ。
 あいかた【合×方】①歌い手に対し、三味線舞をひく者。②芝居のせりふの間などに入れる三味線。③長唄・舞の合の手の長いもの。④謡曲の囃子方。
 あいかた【相×方】①あいて。②遊客の相手の遊女。マ多く、敵娼と書く。
 あいも【合×間】鴨×鴨。マガモとアオヒアヒルとの雑種。肉は食用。
 あいかわらず【合×手】【副】今までのとおり。
 あいかん【哀×感】ものがなしの感じ。悲哀感。
 あいかん【哀×顔】かなしみとよこび。「一を共にする」。
 あいがん【哀×顔】名×ス自人の同情心にうたえて物事を願うこと。
 あいがん【愛×玩】名×ス他「かわいがっておもちゃにする」。
 あいがん【愛×着×合着】①春や秋に着る洋服。あいふく。▽夏と冬との間に着るから。②上着と下着との間に着る衣服。
 あいきやく【相×客】①宿屋で同室にとまり合わせる客。②同席の客。
 あいきょう【愛×敬×愛×嬌】①女子供などが「ここしてかわいらしいこと」。「狼は一者だ」②商人・芸人が「他から好かれようと、人づきよくふるまうこと」。「一を振るまへ」
 あいきょう【愛×嬌】自分の生まれた土地「故郷」を愛あいきょうげん【閨×証言】能の中で狂言師の受け持つ演技またはその役柄。「あい」とも。
 あいぎん【愛×吟】名×ス他「好んで口ずさむこと」。
 あいくち【合×口】①つばのない短刀。九寸五分。
 あいくち【合×口】②話のあう人。
 あいくるしい【愛×くるしい】「形」見るからにかわいらしい。可愛く。②話のあう人。
 あいけん【愛×犬】①かわいがっている犬。②犬をかわいがること。「一家」
 あいこ【合×心】たがいに勝負のないこと。「一勝一敗でお」
 あいこ【愛×顧】客が商人・芸人などを最良やなし、目をかけ引き立てること。「お客様に御一にむくいて」マ

最良される側から言ひ語。

あいこ【愛×護】名×ス他「かわいがりかばうこと」。
 あいこ【愛×好】名×ス他「物事を愛し好むこと」。
 あいこ【哀×口】中国・朝鮮で葬式の時、かなしみの表現として声をあげ泣きさぶること。
 あいこ【愛×心】自分の国を愛すること。「一者」
 あいこ【合×言】①前もって打ち合わせである合図の言葉。「山」と問いかけたら「川」と答えるなど、おたがいが仲間であることを示すもの。②大勢の間で、ある主張の旗印として使う言葉。標語。モットー。戦後日本には民主主義だ。
 あいさい【愛×妻】①大事にしている妻。②妻を愛し大事にすること。「一家」
 あいさい【合×接×接】名×ス自①人と会ったとき取りかわす儀礼的な動作言葉。「初対面」②儀式・就任・離任などの時、祝意・謝意・親愛の意などを述べる言葉。「一場の一幕を述べる」「一状」③応対。返事。「知らせたに何の—もない」マも、仏教語。
 あいし【哀×史】かわいそうな物語。「女工」
 あいし【哀×詩】悲しい事をよんだ詩。
 あいじ【愛×児】親がかわいがっている子供。いとこ。
 あいじやく【愛×着】名×ス自「愛情にひかれて思い切れないうこと」マ「あいくち」ともいう。もと仏教で、欲望にとらわれて離れられないこと。
 アイシャドウ ①また、その化粧に塗る色。灰色などの化粧をする。②また、その化粧に塗る色。顔に陰影をあてる。Dye shadow
 あいしゅう【愛×書】①本が好きなこと。「一家」②愛読している本。
 あいしゅう【相×性×合性】①陰陽五行説で、男女の性が合うこと。生年月日を五行に割り当て、水と木、土と金を相性とするなど。結婚などによいとした。②性格のよく合うこと。
 あいしゅう【哀×唄】悲しいたぐい。いたましい感じ。
 あいしゅう【愛×唄】名×ス他「好んで歌うこと」。「一歌」②愛・誦・愛・唄「名×ス他」好んで口ずさむこと。「牧水の歌をする」。

あいしゅう【愛×妻】氣にいらぬのめかけ。
 あいしゅう【愛×親】親しい間から親愛の氣持を含めて呼ぶ特別の名まえ。
 あいじょう【愛×嬌】親がかわいがっている娘。まなむす。
 あいじょう【愛×情】相手にそそく愛の氣持。④深く愛するあたから愛情。「母の—」仕事に—を持つ。⑤異性を恋慕する感情。
 あいじろ【合×印】①味方どうしを敵と間違えないように、区別につけるしるし。②裁縫で、二枚以上の布を正しく合わせるためのしるし。マのは多く「台標」と書き「あいす」愛人。恋愛の相手。
 あいじん【愛×人】恋愛の相手。
 あいじん【愛×人】愛する。
 アイス ①氷。②俗に「高利貸」。氷の訳「氷」と音が通ずるの、もう一つ言う。— キャンデー。一種の水菓子。マ日本で ice と candy とを合わせて作った語。— クリーム。牛乳、卵のききに砂糖・香料を加え、ませ合わせて凍らせた菓子。水菓子。マで cream — ホッケー。氷上でスケートをはいするホッケー。Dye hockey
 あいず【合×図】互いに約束した方法で、ある事柄を知あいう【愛×す】サ変他「それに対し愛をそそぐ」④かわいがり、いづく「子」を。大切にする。「国を—」⑤異性を恋慕する。⑥物事を強く好む。「酒を—」愛する。サ変
 あいせい【愛×嬌】氣にいらぬ。
 あいせい【哀×性】名×ス他「人の死をかなしみおしむこと」。
 あいせい【愛×性】名×ス他「おしんで大切にすること」。「の念」
 あいせい【哀×切】「タタ」非常にあわれで物悲しい。
 あいせい【哀×絶】非常に悲しい。
 あいぜん【愛×染】①煩惱に染まる。マ愛着に染まる。意から出た。②愛染明王の略。— マ愛着。③「明王」(仏)三目六手をそなえ、怒りの相をあらわし、愛欲を支配する神。
 アイゼン 鉄製の登山用かんじき。アイゼン。
 あいそ【哀×訴】名×ス自「同情を求めたげき訴えること」
 あいそ【愛×想】「あいそう」の転。①にこやかに人づきのよいて。「—のよい人」②人に寄せる愛情・好意。

「がつくる(あきていやる)」「をつかう(いやになつて取り合はなう)」「お(おせい)」「料理屋の勘定」「なえん、おー」「つかし」「一尽かし」愛想がつきて取り合はなうこと。

あいぞう【愛憎】愛する(こと)憎む(こと)。(個人個人に對する)すき(こと)。「の念がはなはしい」。

あいぞく【愛息】名(ス他)大事にまつておくこと。

アイソトープ【原子番号が同じで、原子量が異なる元素。同位元素。Isotope】。

あいだ【間】①あれとこれと二つのものにはさまれた部分。「陸地と島との海面」②空間や時間の隔た。すま。絶えま。「木立のーから山が見える」爆発音がーを置いてびく。③ひと続きの時間・空間。「三日のー高熱が続いた」「こまのーすつと松並木だ」④関係。あいだがら。「彼のーがしつくりしない」⑤ゆえに。から。「御送り候ー御受納被下度(な)候」⑥(4)から転じ、接続助詞的に使う。

あいた【相対】①さしむかい。当事者だけで事を行なうこと。②合意。「お前と私とーの事でござる(狂言)」「すく(他人をまじえず二人で相談して事を決めること)。

あいだがら【間柄】人と人との関係。①血族・親類の続き。あい。統柄。「親子のーで水くさい」②つきあい。関係。「二人のーはよくない」。

あいだぐい【間食】食事と食事の間に物を食べる。こと。かんしゅ。

あいたしゅぎ【愛他主義】他人の幸福・利益を行爲の目的とする主義。利他主義。マオーギ・ストコントが唱え出した。

あいぢやく【愛着】「名(ス自)」「あいぢやく。あいぢやく【哀調】もの悲しい調子。

あいぢやく【愛重】「名(ス他)」「愛て大事にする(こと)。

あいぢやく【相拙】「ーを打つ」人の話を聞きながら、同意・同感のしるしをせず。人の話に調子を合わせず。マとと「相拙」は、刀を作る時など、相手となつて鑄を入れること。むじつち。

あいて【相手】①自分といつしよに物事をする人。「話(こと)のー」②自分と對抗して物事を争う人。「一に取つて不足はない」③た「一方」相手の側。相手。ーどる。「一取る」「四他」争ひの相手とする。特に、訴訟の相手として訴へる。

アイデア【理想】②考え。着想。③「哲学」理念。イデア。④「哲学」概念。Idea

あいしゅ【弟子】同じ先生や師匠について、共に学ぶ者。同門。

あいどう【哀悼】「名(ス他)」「人の死を悲しむいたむこと。

あいどく【愛読】「名(ス他)」「書物を好んで読むこと。

アイドール【偶像。崇拜するもの。Idol】。「一者」。

あいなし【一】おもむきのない。かわいげがない。「梨」。

②の花、……にその色よりしてよく見ゆるを(枕)②。うとまじ。「一く目をさめ(慕)」「わくもない」。

③「涙ぐみたり(源氏)」「④言ひようがない。「一く世の人よろこび申す(栄花)」。

あいなめ【浅海魚。普通、緑をおびた茶色。長き約三〇センチ。食用。別称。あぶら。]

あいなる【相成る】「四目」①あい(相)②。あいにく【生憎】「副タタ」おりが悪いさま。何かしようとした時に、都合の悪い状態がおこつたこと。「遠足にはーの雨だ」「おーさま」。

あいのこ【合の子。間の子】①種類の違う生物または異人種の間に生まれた子。雑種。混血児。②どちらともない。中間のもの。

あいのて【間の手・合の手】①三味線(さんば)曲で歌と歌との間に入る三味線だけの間奏。②話・物事の進行に応じて、他の者がさしはさむ言葉・物事。「ーを入れる」。

あいのり【相乗り】(車など)いつしよに乗ること。

あいは【愛馬】①かわいがつて大事にしている馬。②馬をかわいがること。

あいは【合判】①「あいいん(合印)」。②連帯でお

あいは【合判】①「あいいん(合印)」。②連帯でお

あいは【合判】①「あいいん(合印)」。②連帯でお

あいは【合判】①「あいいん(合印)」。②連帯でお

あいは【合判】①「あいいん(合印)」。②連帯でお

横一〇センチ強。③浮世絵版画で縦一尺一寸(約三

あいびん【達引・縛束】男女がひきあつてうご

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あいふ【合符】駅で手荷物を引き受けた時、その証

あ

あかい「赤い」①あか色をしている。②赤色が多くて色が美しい。「一べべ、織りて着せう」(『着せう』の「百合若大臣野守鏡」) ③共產主義的だ。左傾している。図あかし④

あかいわし「赤鯛」①ぬかづけにしたいわし。それを干したいわし。②さびた刀。▽あかいわしに似ているから。

あかえい「赤鯛」菱形のメートルほどの魚。黄褐色の皮で、尾に有毒のとげがある。南海の産。食用。

あかがい「赤貝」海でとれる二枚貝の一種。殻は心臓形で直径が四十一、三本ある。肉は赤くてうまい。あかかえる「赤蛙」背が赤茶色で斑点のある、かえる。本州至る所の山地・山間部にすむ。

あかがし「赤檜」なな科の常緑高木。高さ一〇メートルほどになり、材は赤く、質が堅いので用途が広い。

あかがね「銅」銅。▽赤みを呈するから。単に「あか」ともいう。

あかがみ「赤紙」①赤い色の紙。②(俗)召集令状。まあかき「赤木」①皮をはいだままの丸木の材木。②黒木。③赤い色の木材。ウメ・カリン・シタンなど。

あがき「足」置きあがき。①したばたすること。気をもむこと。②馬が前足で地面をかいて進むこと。ようもない。③馬が前足で地面をかいて進むこと。

あかきつ「赤切符」もとの汽車の三等乗車券。▽赤い色をしてきたから。

あかぎれ「足跡」寒のために手足の皮が裂けること。あがく「足」掻く。④四目①馬などが前あたり、地面を掻く。また、そのようにして進む。②したばたする。もく、気をむ。

あかげ「赤毛」①赤みをおびた髪の毛。②馬の毛色で赤あかゲット「赤ゲット」①赤い色の毛布。②都見物の地方の人。おのほりさん。▽明治時代に東京見物の地方人の多くが、赤い毛布を羽織っていたから。③ふなれあかこ「赤子」生まれてまもない子。「な洋行者、あかここのう」(『赤行書』(書留など)重要な郵便物を送るのに使う、赤い色の袋。

あかさ「藜」原野に自生するあかさ科の一年生植物。高さ一メートルに達する。葉は三角状卵形。若芽は紅色の粉におおわれている。若葉は諸種のビタミンを含み、

食用になる。茎をかわかしてつえとする。「一の葉(ひ)」(粗末な食物のため)

あかさう「赤砂糖」精製しない赤茶色の砂糖。

あかさび「赤錆」鉄などに生じる赤い色をしたさび。

あかし「物」物がはつきりしていて暗さがない。①「明あかし」あきかた。あかり。②「赤心」邪心のな、誠意に満ちた。③「赤心」あかり。④「赤心」あかり。

あかし「燈」あかり。ともし。▽燈明は「を」をす場所がある。形容詞「あかし」(終止形の名詞的用法)。

あかし「証」確かなよりどころを明らかにすること。証契「証」証明。身を立てるに身の潔白を証拠立てる。▽あかす(明)の(明)の連用形から。

あかし「明石」あかしちり始めの略。夏物の、ちぢみの組織物。▽明石の人がつくり始めたこと。

あかし「赤字」①支出が収入より多いこと。欠損。②黒字。▽不足額の数字は赤く書くから。③校正で誤りを直した「赤地」織物の地の赤いもの。転じて、赤い地色。④「赤」に青く描いた模様。

アカシア①まめ科の常緑の低木または高木。オーストラリアを中心に、熱帯に産し、数百種ある。日本にも暖地に数種ある。▽acacia ②アカシアの俗称。落葉高木。街路樹などにする。一名ハリエンジュ。

あかしん「赤潮」海中での微生物が一時にふえて、水が赤く見えるもの。淡水に起こることもある。

あかしん「赤信筒」止まれ、危険の信号。▽赤い旗、電燈などで示すから。

あかしん「赤新聞」社会の裏面を興味本位に書いた低級な新聞。イエロー・ペーパー。▽赤みをおびた紙を使ったから。

あかす「明かす」④他①あきらかにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「飽かす」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「飽かす」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。

あかす「金」④他①あきかたにする。④隠されたものの秘密をはきりさせる。「手品の種を」。うちあけて「身の上を」。⑤あかせる「漁る火は!」してとせ(万)②夜をすして朝を迎える。「試験勉強で夜を」。③「屏を」。だしぬく。